

ENGLISH NOWの世界

2012 No. 2

- ◎世の中「カワイイ」文化が花盛りです。
高校生にはいまや必須アイテムの携帯電話。
これにも「カワイイ」ストラップが付いています。
⊖ Lesson 5 *Kawaii*



開隆堂

「English なう」



東京国際大学准教授 松林世志子

1 はじめに

Twitterで「～なう」という表現がある。「～しているところ」と現在進行形であることを伝えたいときに使うようだ。たとえば、「会議なう」とか「ダンスなう」などのように、何をしているところかということ伝えてる。場所とともに用いられることも多く、「東京駅なう」とか「ロンドンなう」というように使える。いっそのこと、“I’m in the meeting at a moment.”とか“I’m dancing now.”のように全部英語で言えば、日本人の英語力も飛躍的に向上すると思われるが、ちょっとだけ英語を使うところが日本人の奥ゆかしさ、といったところか。

私はかつて高校の教師をしていたが、仕事を辞めてロンドン大学大学院の Institute of Education に留学した。当時の英語教育界は、イギリスより少し遅れて日本でも Communicative Language Teaching (CLT) が話題になっていた。私自身も東京の British Council が主催する英語教師のための夏休みの泊まりがけセミナーに参加したり、週に2回、平日夜の8時から10時までのコースで British Council が推進する CLT の手法で英語を学んだりしていた。ペアワークやグループワークも当時の英語教育では目新しいもので、おしゃべりな私としては、3人一組のグループワークで思いのたけ話せる CLT の手法に、「これだ!」と思った。

私がそれまでに受けていた英語の授業はといえば、文法訳読中心で、自分の考えなど授業で聞かれることはなかった。ひたすら文法を理解し、書けるようになるまでドリルで練習したり、授業中に生徒があてられて和訳を言い、先生がそれを直したりすることが中心だった。私が教師になったときも、私は、自分が教わったように教えていた。それ以外の発想がなかったから。

British Council が行う英語教師向けのセミナーでは、**ペアやほかの人たちと情報交換することで目的を達成するようなアクティビティ**を使った教え方などを体験した。今では、information gap activity はよく行われるようになったと思うが、当時としては珍しく、「**英語を使わせながら学ばせるというのは、こういうふうに行けるんだ**」と感心したものである。

2 英語教育の今と昔

長い間、英語を学ぶということは、ネイティブみたいな英語を習得することだと思われてきた。私が中学生のときも、口の形のイラストがついた発音のしかたのカードを使って、毎回の授業で練習した。当時の NHK テレビの英会話番組でも、ネイティブの先生の口のあたりがアップになって、リピートさせる番組があったのを思い出す。日本の英語教育の“English then”は、ネイティブの真似をすることだった。今でも、教師がきれいな英語の発音を提示することは大事だと思うが、英語が国際語となった今、**日本人が日本人のアイデンティティーを表しながら英語を使う**ことは、むしろ歓迎されているように思える。聞き手に負担を感じさせない限りにおいては、英語のモデルは、もはやネイティブスピーカーではない。日本人の先生方は、自信をもって、ご自身の英語を使って、むしろ「**自分が使える英語でいい**」ということを生徒に伝えてほしい。先生自身が英語使用者 (an English user) のモデルになってほしい。英語学習者が、聞き手が負担を感じないくらいの英語を身につけるには、練習が必要だろうが、少しずつ体得していけばいいと思う。では、聞き手が負担を感じないような英語とはどんな英語だろうか。

3 聞きやすい英語

ロンドンに留学していたころにこんなことがあった。私の友達にベネズエラ出身の20代の男の人がいた。彼のお母さんが、今まで一度も故郷からでたことがないのに、意を決してベネズエラから彼に会いに来た。お母さんは初級レベルの英語を学んでいたの、息子に会うほかに、自分の英語を使ってほかの国の人たちとも話したいと思っていた。しかし、ロンドンでは周りの人が容赦なく普通のスピードで話すので、さっぱりわからない。数日して、すっかりホームシックになってしまい、早く家に帰りたいと言いだした。ベネズエラの友達は、イギリス人やほかの国の友達を呼んで、お母さんと一緒に食事をすることにした。お母さんに、いろいろな国の人と話すという夢を実現させてあげたかったのだ。しかし、そこにいた人たちは初級英語で話すことに慣れていなかったの、お母さんはみんなの英語がわからないといって、困って

いた。そのお母さんが、私の英語だけわかる、と感激してくれました。私は初級レベルの英語に合わせて英語を使ったので、私とは会話できて、人生で初めて日本人と話せた、と喜んだのである。そのとき、私の英語で国際的には通じるのだ、と自信をつけた。

聞き手が負担を感じないような英語というのは、ネイティブのように流暢にペラペラしゃべる英語ではない。聞き手がネイティブならばそれでもいいだろう。しかし、英語が国際語となった今、話す相手が必ずしも英語母語話者とは限らない。聞き手に負担をかけない話し方は、相手に合わせるということである。相手が、初級レベルの人ならば、どこの国の人であっても、話すスピードは、遅くがいいが、大事なことは、実はスピードではない。**意味のまとまりごとに話す**ことが大事だ。チャンクごとにポーズを長めにとって話す、聞きやすくなる。1文は長くせずに、短文にするほうが、聞きながら理解しやすい。もちろん、単語も易しい単語を意識的に選んで使うのがよい。とくに初級レベルの英語では、強弱のリズムが一定になるようなリズムのいい英語をたくさん聞くとよい。

ENGLISH NOW I は初級レベルの教科書なので、なるべく短文で、易しい単語で、なるべくなら音読した時にリズムがよくなるような英語で書いた。英語を使って授業をされるときも、**チャンクとチャンクの間にはポーズを長めにとって、易しい単語を使って、短文で話しかける**といいと思う。

こういう私も、今となっては、ロンドンで受けた体験を忘れて、大学の授業で速く話してしまい、「先生の英語は聞き取れない」と学生に言われてしまうことがある。ネイティブの先生がゆっくり、短文で話すのを見て、教師の英語はこうあらねば、と自分に言い聞かせている。

4 グローバル時代を生きる人に教える

発音については、ネイティブの発音でなくてもいい、日本人のアイデンティティーを表しながら英語を使う“English users”としてのモデルに教師はなるべきだと思う。

ロンドンに留学していた1992年頃、ロンドンには、ホームレスの若者が“Change, please!”とあちらこちらで物乞いをしていました。身なりは普通の若者だが、家を出て仕事がないとホームレスになる。仕事のチャンスが若者にいきわたっていませんでした。その頃、イギリス人たちから聞いたことは次のようなものである。イギリスには「英語もフランス語もできるフランス人」や「英語も中国語もできる中国人」のように、英語ができる外国人がたくさんいる。「英語しかできない」学校を出たばかりのイギリス人と、英語もフランス語もできる実務経験ありの人と、あなたが会社の社長ならば、どちらを採用したいと思うか、と。私はそれを聞いて、英語を学ばなくてもいい立場でうらやましいと思っていたが、英語母語

話者には彼らなりの苦勞があるものだった。最近、日本国内でも、日本語が上手な非日本語母語話者が以前より増えたように思われる。グローバル時代を生きる人は、母語のほかに外国語ができるほうがいい。仕事で英語を使えるレベルは遠い先のこともかもしれないが、どんなに先のことで、少しずつ前に進むほうがいいだろう。

今までは、日本国内では英語を使わないので、「なぜ英語を学ぶのか」と聞く生徒も多かった。しかし、グローバル化が進んできた今、生徒自身も英語の必要性を感じているのではないだろうか。

英語がいかに必要かというだけでなく、今は、インターネットで海外の情報が以前より簡単に得られる。私が教えている大学生たちも、留学すると日本にいる友達や別の国に留学中の人同士で、スカイプで連絡を取り合っているそうである。海外で友達ができたら、帰国後に、やはりスカイプで話したりするそうである。

英語教師は、英語使用の現在、すなわち「English なく」の状況にアンテナを張り、自分自身の英語力を高めながら、**グローバル時代を生きる人たちを育てている**という意識をもつことが必要ではないか。

先生方が英語力を維持する方法として、インターネットを利用して音声を聞きながら学べる方法はいろいろあると思うが、CNN Student News をインターネットで検索してみてもいい。易しめの英語で短くまとめられた英語のニュースが動画とともに毎日新しい話題で聞ける。アメリカの高校生が話す英語も聞けて、勉強になる。

5 英語の基礎としての文法と語彙

「コミュニケーション英語 I」という科目名は、「英語 I」とは違い、「コミュニケーションとしての英語を教えるのですよ」と言われているように感じるが、コミュニケーションを図るには、やはり文法の知識と語彙は必要だろう。たとえば、野球の試合で勝つためには、練習試合だけを数回行っただけで勝てるかということ、そういうことはないだろう。走り込んだり、投げたり、走りながらボールを取る練習をしたりしながら、それらの部分としての技能を統合させる力を練習試合で試して、本番の試合でうまくいくわけである。英語も、さまざまな「部分の練習」と、「統合させる練習」が必要である。**文法と語彙は英語の総合力を支える基礎**となる。

ENGLISH NOW I では、中学英語を復習しながら学べるように、各課にターゲットとなる文法項目を設けている。例文は、なるべくイラストから意味がわかるようにした。文法学習が知識に終わらないよう、ドリル的な練習問題のほかに、対話練習や体験的に練習できる文法の Activity のコーナーも設けた。

6 PPPの教え方

British Council で英語教師向けのコースで学んでいたときに、イギリスではPPPの順で教えることは、伝統的な教え方で、よく知られていると初めて聞いた。

Presentation-Practice-Productionの順だが、初めに、新出文法などをコンテキストの中で見せて、次に機械的なドリルやコミュニケーションなActivityでコンテキストの中で学んだ文法を何度も使うことで練習してから、最後に、自分の気持ちや考えを使える手段として、学んだ文法を使って表現する、という順番で教えるということである。新しく学んだことを学んですぐにproductionにつながれないという批判もあるが、最後にproductionがあることで、自分で言葉として使ってみたら「通じた！」という体験ができるのではないと思う。「英語で通じた」という達成感、たとえ簡単な1文を言うだけでも初級レベルでは、モチベーションにつながるだろう。

practice(練習)は、テストではない。難しい問題で間違わせてから、それを解説するのではなく、ドリルで何度も正解させて、「わかった！」という気持ちに導くのがコツである。「できなかった」体験を繰り返すと、できる気がしない気持ちになり、自信をなくすことにつながりかねない。「できた」体験を多くし「ほめる」ことで、自信をつけさせて、さらに学びたいという気持ちにさせたい。

山本五十六の言葉で、次のようなものがある。

「やってみせ、言って聞かせて、させてみて、
ほめてやらねば、人は動かじ」

この言葉を聞いたときに、PPPと似ていると思った。PPPは特別な教え方ではなく、人に新しいことを教えて、できる

ようにさせて、さらにやる気にさせる教え方として自然な順序なのだと思う。「通じた！」という思いは、人からほめられたのと同じように、うれしいものである。「私にもできる！」と自分をほめたい気持ちであろう。「ほめる」は英語で“praise”だから、PPP+Pで「ほめる」ことを忘れないようにしたい。

7 「何を」「誰に」「どんなふうに」教えるのか

どのような英語を、どのような相手に、どのように教えるか、私の思うところを少し書いてきた。「どのような相手に」と簡単に言うが、実際の学校にはいろいろな生徒がいることだろう。私がかつて高校で教えたときには、一生懸命に教えているつもりなのに、寝ている生徒や授業内容とは関係ないおしゃべりをしている生徒がいた。自分の力不足を嘆きながらも、「うちじゃ何もできない」という同僚の言葉に励まされたりもした。しかし、あるとき気がついた。「うちじゃ何もできない」ということで、生徒の学ぶチャンスを奪っている自分に。生徒は学校に来ているのだから、本当は学びたいと思っている。できるなら、英語も話せるようになりたいと思っているに違いない。「勉強したくないけど、ペラペラになりたい」という生徒もいるだろう。何もしないでできるようにはならないだろうが、先生が授業を工夫することで、英語が好きになって、自分から学びたいと思うかもしれない。そのような(本当は)学びたいと思っている生徒たちが、英語が「わかった」、「できるようになってうれしい」という気持ちで英語を学んでいるとき、生徒たちは「Englishなう」と、心の中でつぶやいているかもしれない。ENGLISH NOW Iは、先生方や生徒たちの「Englishなう！」を支えるテキストでありたいと願っている。

高等学校英語指導資料『ENGLISH NOWの世界』

平成24年5月25日発行

発行 開隆堂出版株式会社 113-8608 東京都文京区向丘1-13-1 電話 (03)5684-6115

印刷 株式会社興陽社 113-0024 東京都文京区西片1-17-8